

## 『豊臣政権の統治構造』

谷徹也\*著、名古屋大学出版会、2025年

佐 島 顕 子†

本書は、著者がこの10年に発表した13本の論文を全面改稿の上、新稿2章と序章・終章を加えて新しい豊臣政権論を世に問う力作である。本文約500頁に対して2段組注100頁に及ぶ堂々たる大著である。著者は広汎な史料収集と精緻な読解、手堅い論証、そして膨大な学説史を鋭く読み取る手腕で注目されてきたが、ここにその期待の一書が上梓された。

本書の構成は次の通りである。

### 序章 豊臣政権研究序説

#### 第1部 豊臣政権の内部構造

##### 第1章 豊臣氏奉行発給文書考

##### 第2章 豊臣政権の算用体制

##### 第3章 豊臣政権の訴訟対応

##### 第4章 秀吉死後の政権運営

#### 第2部 豊臣政権の国家編成

##### 第5章 豊臣政権の京都再編

##### 第6章 豊臣政権の〈首都〉と城郭

##### 第7章 豊臣政権の竹木統制

##### 第8章 豊臣政権の大名課役

#### 第3部 対外戦争と国内統治

##### 第9章 壬辰戦争と〈豊臣の平和〉

##### 第10章 壬辰戦争時の国内政策——次舟・人留・人掃

##### 第11章 豊臣政権の「喧嘩停止」と畿内・近国社会

##### 第12章 豊臣大名の領国統治

### 終章 豊臣政権論

本書の価値の第一は、序章の「研究序説」である。朝尾直弘が豊臣政権を移行期政権と把握する

---

\* 立命館大学文学部教授

† 福岡女学院大学人文学部教授

sajima711@fukujo.ac.jp

視角を打ち出して以来<sup>1</sup> 領域ごとに深められてきた多くの研究について、それぞれの到達点と課題をあざやかに明示する。主流学説の流れを分析するのみならず、戦前の研究からも引き継ぐべき視点をすくい上げ、研究史の展開過程で途絶した議論、発表当時は真価を捉えきれなかった論点、先駆的な視座にも光を当て、今日的議論の俎上に載せた学説史構築は、豊臣政権研究のゆたかな可能性を開くものである。

続く本論においては、政権の特質を究めるに必要な議論が力強く展開される。第1部「豊臣政権の内部構造」では、全国統一にともない秀吉直臣団から中枢吏僚層が台頭し、後継者問題を背景に奉行制が成立する過程を明らかにする。第2部「豊臣政権の国家編成」では政権と大名・朝廷・寺社・諸勢力の関係構築の場としての〈首都〉に注目し、政権による国家統合原理を探る。第3部「対外戦争と国内統治」では東アジア動向の中に日本の「近世化」を位置づける。

そして終章で、既往研究の薄い面・積み残した課題に正面から応えた著者ならではの「豊臣政権論」が現れる。従来の理解における豊臣政権の特質は、諸大名が領内権力強化のために中央政権の後ろ盾を必要とした「集権に寄りかかる分権」にあり、政権には分権を認めざるを得ない「限界」があったとされる。それに対して著者は、急速に形成される政権側にも「分権（自立した大名・諸集団）」の必要があり、集権と分権は依存関係にあること、それを「もたれあう集権と分権」と喝破する。

国内史料にとどまらず朝鮮・明史料や宣教師史料を広汎に収集し、城郭史や都市史のゆたかな成果にも学び、豊臣政権を虚心坦懐あるがままに観察した結果、著者はこの大胆な結論に至った。

数々の重要な図表（奉行衆の花押変遷図・奉行制成立過程図解・秀吉の拠点と〈首都〉の変遷図・案件ごとの文書目録や関係者一覧など）は著者の研究歳月の精髓であり、斯界に大きく寄与する。

本書の重要な論点をすべて挙げることは評者の能力を超えるので、ここでは2、3の成果に限り紹介したい。

まず、秀吉権力が絶大でありながら法令や政策が貫徹しない実態を、政権の未熟性・限界と捉える定説を克服したことである。秀吉の意図を汲んだ吏僚・奉行衆が地域事情を背負い能動的に切り返す諸勢力と向き合い、法令・政策と実態の間で「才覚」を働かせたことが、政権にも社会にも安定をもたらしたとする。吏僚層・奉行衆個々人の動向を逐一把握した上での著者の見解は十分に説得的である。

著者が指摘する通り、戦国期を克服した豊臣政権は百姓を「もはや殺せない」し、大名もむやみに滅ぼせない。相手を敵とせず、味方として包摂することで社会秩序を保つ構造を構築せざるを得なかったのである。

奉行衆や「取次」の水面下交渉や情報漏洩、「欺瞞に満ちた」和議交渉や外交関係に秀吉が一方的に騙された、あるいは妥協を強いられたというより、むしろ秀吉のほうこそ掟おきての強権的完遂を望んでいなかったという視座の獲得は、豊臣期の色彩を一変させる。

秀吉の掟の多くは都度、個別関係者に示されるが、それが秀吉の意向なら諸大名は「聞いていない、知らなかった」では済まされない。明確でない秀吉の意を忖度するため、大名同士の情報交

<sup>1</sup> 朝尾直弘（2004）「豊臣政権論」（初出1963年）『朝尾直弘著作集』第3巻、岩波書店。

換・奉行や中枢層との交際が展開される場が〈首都〉であったというのは卓見である。統治者が掟を曖昧にすることで被支配層の振舞いを牽制し、秀吉個人や政権に莫大な進物・礼物を呼ぶ余地が生まれる。明快な法治主義に賄<sup>まい</sup>は馴染まない。

地域における自力救済を閉じて〈首都〉での訴訟に置き替えたこと、その秀吉の統治構造自体が、世の富を天下人に集中する仕組（役・儀礼・進物・資本など）であった。諸勢力は利益や保護を求め、有利な裁定を得るために手段を講じる。京都・大坂・伏見の三都が併存する〈首都〉は新しい「主戦場」であった。

政権が諸大名に〈首都〉への参礼・集住を強く働きかけたのも、主従関係の強化のみならず、統一政権の強大さを「わからせる」ことで私的紛争に走らせない手立てであっただろう。

次に、政権中枢吏僚層の解像度を飛躍的に上げたことが大きな成果として挙げられる。彼らの花押変遷を把握することで奉行文書の年次比定正確性を高め、天下人と社会をつなぐ中枢吏僚層の動きを可視化した意義は大きい。

政権初期、直臣層は案件ごとに指名されて秀吉を補佐したが、その人員は流動的であった。それが鶴松・お拾いという直系後継者を得た結果、天正17年（1589）・文禄3年（1594）を画期として中枢奉行層が台頭し、秀吉の政務を分掌する奉行制が志向されるなど、政権の永続性が図られたと著者は分析する。

すなわち政権の版図拡大につれ、秀吉と離れた地で独自決裁する直臣層の才覚の水準は上がっただろう。秀吉の意に沿わぬ結果をもたらした者は淘汰され、特定方面に優れた者はスペシャリスト扱いで直轄地や大名家中に派遣されて中枢を去る。

他方、検地や訴訟など各種案件に携わり、天下統一につれて活動範囲を全国に広げた者は豊富な経験を蓄積し、在地への多様な理解が深まる。その結果、オールラウンドに解決能力の長けた人物が中央で生き残り、大名の地位も得て、奉行衆という執政階層になっていった。

各地に封じられた秀吉近臣は役を負擔し、在地との軋轢<sup>あつれき</sup>にも直面する。「集権」への貢献と「分権」としての存立という矛盾に、彼らがどう対応したかも気になるところである。

さて、秀吉の意を現実化する能力に長けた吏僚層が奉行衆として固定化し、諸勢力間の秩序を維持したもののだが、彼らが拠って立つ正当性は秀吉死後も維持されたと見てよいだろうか。

著者は、秀吉という上位者が失われれば政権が倒れるのは「自明の理」という観点を排し、秀吉死後の政局を丹念に跡づける。その結果、「太閤様御置目」を遵守し「秀頼様御為」を実現すること——「秀吉死後の豊臣の平和」か——が目指され、その手段の相違が争われたと捉える。

では相違はどこに起因したものか。諸大名はポスト秀吉の集権運営が彼らに益するか否か、この「集権」に寄りかかる利点と甘受する損害を厳しく査定しただろう。利害の異なる地域分権側が自らに「望ましい集権」を求める、あるいは「集権」自体への期待値を下げた時、「集権」側も新しい対応を模索する過程で内部に桎梏<sup>しっこく</sup>を抱えるに至ったと見るべきだろうか。

第三に、東アジア世界における「壬辰戦争」を近世日本・豊臣政権論に位置づける試みに目を惹かれる。

昨今活況を呈している研究分野だが、日本・朝鮮・明・欧文史料の収集・読み合わせが複雑で学説も厚く、海外研究にも目配りする必要がある。しかも戦前の総督府下でなされた朝鮮史研究が

把握した史実でさえ、戦後史学が確認できているとはいいがたい。この研究はもはや個人で進められるものではなく、広く「協働」が試みられている状況である。

この茫漠たる難渋に対して著者は、豊臣政権が始めた「壬辰戦争」の意味、「壬辰戦争」によって政権が受けた影響を整理することで、議論を政権論に回収する幾筋もの小径へ案内する。

従来、天正17年の秀吉の「唐入り」表明を鶴松夭折にのみ帰する俗説に反発するように、研究分野で鶴松への関心は希薄だった。しかし著者は、直系後継者獲得と喪失が政権構築に及ぼす影響という視角から、この問題を注意深く検討する。

また、「唐入り」構想すなわち外交と戦争において、朝鮮と明を峻別すべきという著者の指摘は重要である。秀吉の本意は戦闘突入ではなく外交あるいは政略にある。

その意味で、朝鮮の「服属儀礼」が済めば出兵に至らなかった可能性にも著者は注意を向ける。この興味深い仮定に導かれて考えると、天正15年に秀吉が朝鮮侵攻への参加を対馬宗氏に命じた結果、宗氏は朝鮮の「参礼使」を実現した。したがって同18年に明侵攻への参加を朝鮮に求めれば、朝鮮は受容するか日明外交を仲介すると秀吉は考えたであろう。だが結果的に朝鮮は動かず、2度目の参礼もなかった。秀吉は明侵攻の道中に朝鮮動座し、政権軍事力を実見させて朝鮮の帰参を求めることになっただろう。九州大友氏も1度の大坂参礼だけでは領知安堵を得られなかった。朝鮮も、秀吉軍営に参陣して人質を提出し、領土の一部を秀吉に譲るまで、服属儀礼は完了しない。

一方、「唐入り」は朝鮮経由ではなく浙江直行の可能性があった点にも著者は言及する。たしかに室町期渡航先も秀吉隠居予定地も寧波であり、『宣祖実録』にも浙江直入案が散見する。浙江ルートの明侵攻ならば、帰服が未確定でも朝鮮は見過ごされ、宗・小西交渉の二重性は他地域外交のように目立たないまま済んだであろうか。今後、海賊停止令・倭寇取締・琉球外交など東アジア世界に関わる研究が求められる。

「唐入り（明侵攻）」は天正19年8月の計画具体化から、朝鮮来援明軍との衝突を経て日明和議方針に転換するまでの1年余に限るもので、7年間の戦争自体を指す言葉としては適当でないことも著者は整理した。

では朝鮮に置かれた諸大名軍は慶長3年（1598）まで何をしていたのか。かつて政権が九州入りして秋月・島津氏等の降伏を勝ち取ったように、朝鮮の「豊臣化」を目指した軍事行動の一環と考えられるものの、本書の示唆するところはそこに留まらない。名護屋に全国大名の陣屋を置かせて〈首都〉化したこと、西国大名を領地から遠ざけ長期にわたって経済的負担を強いた豊臣政権の統治とは何であったのか、考えさせられる。

そして惣無事令の持ち出し、すなわち〈豊臣の平和〉が朝鮮にとっては惨禍となった点について、著者も〈豊臣の平和〉の内実や矛盾を突き、国内統治に及ぼした影響を考察する。

列島戦国社会が「平和令」を受容した背景には「自力の惨禍」を止める志向があったものの、中央集権国家・朝鮮に〈豊臣が与える平和〉の需要は皆無であっただろう。むしろ、各地で義兵が起ち、経年侵略の飢餓状態が民衆反乱を呼ぶなど、朝鮮は自力救済社会に叩き込まれた。王朝は義兵を指揮系統に入れ、民乱鎮静を優先するため日明和議を受忍して統治構造の修復を図ったが、虐殺・拉致・流民という人的・物的被害や文化的損傷の惨禍が長く残ったことが想起される。

ところで、朝鮮での統治挫折経験によって諸大名が民政への視角を獲得したと見るのはどうだろうか。莫大な軍費支出と人員動員、秀吉の頻繁なイベントへの参加という「集権の重し」から解放されたことで、諸大名が自領経営と家中合理化に集中できるようになったとは見られないだろうか。



なお小さなことだが、日明和議の小西交渉が貢（対明貿易権）を求めたのに冊封しか得られなかった蹉跌<sup>さてつ</sup>を受容するよう勧めた人物が沈とされるが（316 頁）、これは譚（譚都司・譚宗仁）である。譚宗仁は、内藤如安の身代わり人質として小西宮に 1 年半拘留されていた明の軍官で、「冊封されれば明への遣使と礼物贈答が可能になる」と小西を説得した。秀吉が冊封について「姑忍耐<sup>しばらく</sup>す」（黄慎「日本往還日記」9 月 6 日条）と述べたのも、将来的な貿易利権を期待したからであろう。この和議が沈惟敬ひとりの口舌にたぶらかされたのではなく、譚宗仁・王官・陳雲鴻など複数の軍官がもたらした明兵部の総意に拠ることに留意したい。

取り上げるべき論点は尽きないが、序章から終章まで読み通すと、全く新しい政権像が迫ってくる。朝尾直弘の提起に正面から応えて押さえるべき分野を細部に至るまで洗い直し、ぶれない視角で統治のあり方とその本質について総合的に論じ、ふたたび「政権論」に組み上げた偉業にはひたすら圧倒される。

著者の精緻かつ躍動的な研究が一冊の書物のかたちで我々に与えられたことを幸運として喜びたい。